

## 笠木實と前橋

笠木は、桐生の魚問屋「魚萬」の次男として生まれ、1935年、15歳にして日本エッチング研究所のエッチングプレスを購入している。笠木の初期の代表作はモノクローム版画であり、日本の銅版画の草分け的存在でもあった。中学入学時に油絵具を手に入れて以来、版画と共に油彩画も制作していた。笠木の画歴において大きな転換期になったのは、画家・南城一夫（1900-1986）との出会いであった。1948年、28歳の時に南城に師事することで、笠木の油彩画は色彩豊かに発展し、生涯、春陽会の会員として作品を発表し続けた。

南城は、1937年に12年のフランス滞在を終え、故郷の前橋に戻り、その後は現在の白井屋ホテルのあたりにアトリエを構え、前橋で制作を行った。南城との出会いは、桐生にあった笠木のアトリエに大胡町出身の画家・横堀角次郎が南城を連れてきたことがきっかけであった。また、前橋における共通の知人として黒田寿（ひさし）がいた。黒田は、前橋市大手町にある清心幼稚園の三代目園長である黒田サチの甥にあたり、後にサチの養子に入った。サチは南城の制作活動を支援するなど、芸術家への深い理解を示し、その姿勢を寿も引き継いでいたようだ。南城は、清心幼稚園の卒業生らのための絵画教室を行っており、笠木もその教室で子どもたちと時間を過ごすこともあったという。笠木が、黒田

に送ったという作品《赤い風船》は、現在でも清心幼稚園の園舎に展示されており、アーツ前橋所蔵の《演奏者》（I期展示）、《風船を売る男》（II期展示）と共にパリの街並みを描いた連作とされている。

また、黒田とは長野県の志賀高原へスキーに共に出かける仲間でもあり、自然や森、そして音楽を愛する仲間として交流を続けた。笠木にとって山へ出かける目的はスキーに行くほかに、釣りをすることもあった。笠木は、釣りに関する本を二冊も出版しており（『魚狗の歌』1974年、『岩魚の谷 山女魚の溪』1994年）、これらの著作の中に詩人であり画家でもある辻まこと（父はダダイストで知られる辻潤、母は婦人解放運動家の伊藤野枝）の名前も度々登場する。笠木、黒田、辻の三名はみな、志賀高原に作られたロッジで年に数回集まっては自然の中で共に時間を過ごす仲間であった。



清心幼稚園の園舎に展示されている  
《赤い風船》